

## 日本および中国における『源氏物語』と『紅樓夢』との比較研究について

## Comparative Studies of The Tale of Genji and Hong-lou Meng in Japan and China

渋井 君也

Kimiya Shibui

## 要旨

『源氏物語』は、中国では「日本の『紅樓夢』」と称されることがよくある。初めて『源氏物語』全文を中国語に翻訳した豊子愷は、かつて「白頭今又訳紅樓（白頭今又『紅樓』を訳す）」と書き、『源氏物語』を翻訳することを、『紅樓夢』を翻訳することに喩えた。『紅樓夢』の研究が中国で「紅学」と称されるのに対し、『源氏物語』の研究は「源学」と称される。近年、中国の『源氏物語』の研究が迅速に進むとともに、『源氏物語』と『紅樓夢』との比較研究は、中国における「源学」研究に占める比重が非常に大きいだけでなく、中国文学と外国文学を含む『紅樓夢』の比較文学の研究においても、それに比肩するのは恐らく『紅樓夢』と『金瓶梅』との比較研究のみである。『源氏物語』がそれほどまでに注目されるのは、主に中国の読者からみれば『源氏物語』が、『紅樓夢』と『金瓶梅』以外に貴族家庭小説の特徴を有し、しかも女性描写への傾注を特色とし、貴族社会を描いた長篇世情小説を提供したためである。

●キーワード：日中比較文学 (comparative literature of Japan and China) / 『源氏物語』 (The Tale of Genji) / 『紅樓夢』 (Hong-lou Meng)

## I. はじめに

日本古典文学の最高傑作と称される『源氏物語』が中国に伝わりとすぐ、極めて高い評価が得られた。初めて『源氏物語』全文を中国語に翻訳した豊子愷 (1898-1975) は、「『源氏物語』が世界で最も早く生まれた長編の散文小説であり、中国最初の長編小説の『水滸伝』、『三国志演義』よりも三百年早く、西洋の最初の長編小説であるジョヴァンニ・ボッカッチョの『デカメロン (十日物語)』よりも三百年余り早く現われた<sup>1)</sup>」、との評価を与えた。また『源氏物語』は中国で『紅樓夢』にも解くことのできない縁を結んでいる。中国で古典の最高傑作と称される『紅樓夢』がそれに関連する研究を「紅学」と呼ばれるのに対して、中国の研究者はよく『源氏物語』の研究を「源学」と呼ぶようになっている。『源氏物語』は『白氏文集』など中国の古典文学から深く影響を受けており、成立より長い年月が経っている点などから考えても早い段階で中国に伝わっておかしくはないはずだが、実はそうではない。『水滸伝』と『三国志演義』、『西遊記』、『金瓶梅』などの明代の四大奇書が日本に伝わるのに比べて遅いのは言うまでもないが、『源氏物語』より

800年近く遅れて生まれた清代の『紅樓夢』に比べてさえ、中国の「源学」の研究は、日本の「紅学」の研究より遥かに遅れている。

『紅樓夢』の最も早い刊本は乾隆56年 (1791) 辛亥の冬、萃文書屋から木活字印刷による全百二十回の完本『新鏤全部繡像紅樓夢』であり、即ち後世に言われる「程甲本」である。程甲本が出版されて間もなく、寛政6年 (1794)、『紅樓夢』は俗に言う「南京船」によって長崎にもたらされ<sup>2)</sup>、日本に流布しはじめた。時は明治、駐日参贊 (書記官) の黄遵憲 (字は公度、1848-1905) が王治本 (字は泰園) や石川英 (字は鴻斎) などの日本と中国の友人に『紅樓夢』を話題に出した。すると大河内輝声 (字は桂閣、1848-1882) は『源氏物語』を挙げたのである<sup>3)</sup>。

「鴻斎：民間小説傳弊邦者甚夥，《水滸伝》《三国志》《金瓶梅》《西遊記》《肉蒲團》數種而已。／民間の小説がわが国に伝えるものは甚だ少ない。『水滸伝』『三国志』『金瓶梅』『西遊記』『肉蒲團』數種に過ぎない。

公度：《紅樓夢》乃開天闢地從古到今第一部好小説、

……恨貴邦人不通中語，不能盡得其妙也。  
[此時泰園來了]《紅樓夢》寫盡閨閣兒女性情，……論其文章直與《左》《國》《史》《漢》並妙。/『紅樓夢』は天地開闢以來、昔からいままでの第一のよい小説であるが、……残念ながら貴国の人は中国語を通じないので、その精妙な良さを理解できない。[この時泰園が見えた]『紅樓夢』は閨房の若い男女の気性と愛情を書き尽くし、……その文章を論じれば、『左伝』『国語』『史記』『漢書』と妙を等しくすべきである。

桂閣：弊邦呼《源氏物語》者，其作意能相似。他説榮国府、寧国府閨闈，我寫九重禁庭之情。其作者亦係才女子紫式部者，於此一事而使曹氏驚悸。/わが国に『源氏物語』と呼ぶものは、その作意が似ている。そちらは榮国府・寧国府の閨閣を語るのに対し、こちらは宮中の事情を描くのである。その作者も才女で紫式部というものであり、このことは曹氏を驚かせるであろう。

鴻齋：此文古語，雖國人解之者亦少。/この文は古文中で書かれ、国人でさえも解けるものは少ない。

公度：《源氏物語》亦恨不通日本語，未能讀之。/『源氏物語』もまた残念ながら日本語を通じないため、読めないのだ。

(『大河内文書』の「戊寅筆話」<sup>4)</sup>)

これは明治11年(1878)9月6日の筆談の記録であり、現在確認できる範囲での『源氏物語』と『紅樓夢』の比較についての最も早い記録でもある。当時その場には黄遵憲と大河内輝声のほか、日本に居留する中国の知識人の王治本(字は泰園)と漢詩人の石川英(号は鴻齋)もいた。最も早く『源氏物語』と『紅樓夢』との比較研究の先駆<sup>5)</sup>を開くのは依田学海(1833-1909)が「学海居士」と署名し明治39年(1909)『心乃花』という雑誌で発表した「源氏物語と紅樓夢」<sup>6)</sup>である。

「居士は小説好であるから、幼少の頃からいろいろの小説を讀んで。それから年長ずるに従つて、和漢の稗史を讀み、喜んで批評したが、そのうちに極好なのは、源氏と紅樓夢である。……居士は源氏を小説と見てゐるが、それに似てゐるのが紅樓夢である。」

「又、大觀園といふ一大園地を寫し出して、此十二

人の美人が、それぞれの所に住居して、往來して、詩を鬪はし、歌を唱へて楽しんでゐる。源氏物語の、六條の宮と極めて似てゐる。賈寶玉といふ公子が、このうちに住居して、美人と交際してゐるのが、源氏とは違ひ、情交にあらずして、きはめて淡交である。」

「源氏物語の作と、紅樓夢とは、相去ること數百年餘りの間があるが、どうして如此似たものか。人情といふものは、和漢同様で、才子の筆は妙なものだ。紅樓夢の賈寶玉は、終に至て出家してゐる所がある。これは雲隱より又一奇を出してゐる。」

依田学海は、愛する小説に『源氏物語』と『紅樓夢』を挙げ、また『紅樓夢』における賈寶玉の、大觀園に住み金陵十二釵と交際する点は、『源氏物語』での光源氏が妻たちと六條の宮に住むことと似ているところがあるとする。特に光源氏と賈寶玉、女性の比較研究、大觀園と六條の宮との比較研究は、現代の「源学」と「紅学」との比較研究の中で非常に多いテーマである。

一方、中国では1920年代、謝六逸はその著作の『日本文学』の第五章「平安文学」において専門的に『源氏物語』を論じた<sup>7)</sup>。1930年代、若いころ日本に留学した周作人(1885-1967)は「談日本文化書」において次のように言った。

「紫式部の《源氏物語》五十二卷<sup>8)</sup>成於十世紀時，中國正是宋太宗的時候，去長篇小説的發達還要差五百年，而此大作已經出世，不可不說是一奇蹟。近年英國瓦萊(A・Waley)的譯本六冊刊行，中國讀者也有見到的了。這實在可以說是一部唐朝《紅樓夢》。仿佛覺得以唐代文化之豐富本應該產生這麼的一種大作，不知怎的這光榮却被藤原女士搶了過去了。(周作人「談日本文化書」<sup>9)</sup>)

「紫式部の『源氏物語』五十四帖は十世紀の時に出来上ったのですから、中國で云ひますとちやうど宋の太宗の時分で、中國に於ける長篇小説の發達までにはなほ五百年の隔りがあるのであります、しかるにこの大作が既に世に現はれていたといふことは、まことに一つの奇蹟と云はざるを得ません。近年英國のウェーレー(A・Waley)の譯本が六冊刊行されたので、中國の讀者で見た人もあるでせうが、これは實際一部の唐朝の『紅樓夢』と云へるのであります、唐朝文化の豊富さを以てしたならば當然かかる種類の大作を産み出せた筈だといふやうな氣が何だか致しますけれども、どうしたわけかこの光榮

を藤原の女士のために奪ひさられてしまいました。

(松枝茂夫訳「日本文化を談るの書」<sup>10)</sup>)

周作人のこの文章は民国25年(1936)に書かれ、『瓜豆集』に所収される。後に『瓜豆集』は松枝茂夫によって翻訳され、昭和15年(1940)に日本で出版された。岡一男が著した『源氏物語事典』の第12章「世界文芸史上の位置」においてこの文章の一部が引用されている<sup>11)</sup>。顧鳴塘は、はじめて『源氏物語』に『紅樓夢』をなぞらえた人物は周作人だと考えている<sup>12)</sup>。1950年代、銭稻孫は『源氏物語』の第一帖「桐壺」を翻訳したことがある<sup>13)</sup>が、はじめて『源氏物語』全文を中国語に訳したのは、豊子愷である。

豊子愷は1960年代、すでに『源氏物語』の翻訳をすべて終えていたが、別に作った詞「浣溪沙」の中で「今又白頭訳紅樓(白頭 今又『紅樓』を訳す)<sup>14)</sup>」とあり、『源氏物語』の翻訳を、『紅樓夢』を翻訳することに喩え、当時の心情を表した。後に文化大革命の影響で訳本の出版計画は取り下げられてしまった。1973年に新たに出版計画が上がったが、まだ途中の段階で打ち切りとなった。訳者が死去したのちの1980年代、人民文学出版社による「日本文学叢書」の一つとして、1980年(上)と1982年(中)、1983年(下)において上中下の三冊に分けて続々と出版された。一方、台湾では、林文月による『源氏物語』の翻訳が民国63年(1974)から民国67年(1978)にかけて5冊に分けて中外文学月刊社により続々と出版された。中国における本格的な『源氏物語』の研究は、豊子愷の『源氏物語』の訳本が出版されてから始まったのである。

中国の『源氏物語』の研究は、その始まりこそ遅かったが、近年日本に対する研究が急速に進んでいることにつれ、その研究も大きな進歩を遂げた。そのうち非常に特徴的なのは『源氏物語』と『紅樓夢』の比較研究である。40年近い期間で書かれた二つの作品の比較研究の論文を大雑把に統計してみても、その数は100本以上にものぼる。はじめて『源氏物語』を『紅樓夢』と比較研究したのは日本であるが、日本では『源氏物語』の研究界でも日本の「紅学」の研究でも、二つの作品の比較研究は決して目立っていない。しかし、中国においては、二つの作品の比較研究は、大陸の『源氏物語』研究で非常に重要な一部であるだけでなく、『紅樓夢』と外国文学の比較研究においても最も多く研究される領域である。中国の研究者はなぜ二つの作品の比較研究に興味を持つだろうか。まずこれまでの二つの作品の比較研究に

ついて整理したい。

## II. 日本における『源氏物語』と『紅樓夢』との比較研究について

日本では、『源氏物語』に関する研究において両作品の比較研究が少ないだけでなく、日本の『紅樓夢』研究においても両作品の比較研究はめったに見られない。比較文学の研究に従事する一部の研究者のほかには、一部の来日中国人研究者が二つの作品の比較やそれに関連する研究に取り組んでいる。

益田勝実「紅樓夢論争と源氏物語研究」<sup>15)</sup>は、1950年代の中国の『紅樓夢』論争と『源氏物語』研究の関連性について論述した。松枝茂夫・杉浦明平「対談：『紅樓夢』の魅力」<sup>16)</sup>では、「2『源氏物語』との比較」において二つの作品の相違点が述べられている。目加田さくを「紅樓夢大観園の貴公子と源氏物語六条院の貴公子」<sup>17)</sup>は、大観園と六条院、賈宝玉と光源氏などの比較を通して、紅樓夢世界と源氏物語世界の共通点と相違点について考察した。目加田さくを「紅樓夢と源氏物語——対偶よりみたる——」<sup>18)</sup>は、中国古典の対偶論の視点から、両作品の対偶観や対偶意識を比較して考察した。楊顕義「『源氏物語』と『紅樓夢』——主人公を中心として」<sup>19)</sup>は、両作品に登場する主人公を中心にして両作品の相違点について論述した。陳彬彬「『源氏物語』の空蟬、浮舟と『紅樓夢』の晴雯、尤三姐にみられる反抗的性格について」<sup>20)</sup>は、二つの作品における女性の反抗的な性格について比較して考察した。齋藤喜代子「『紅樓夢』と『源氏物語』の色彩表現について」<sup>21)</sup>は、賈宝玉と光源氏の衣裳の面における色彩感覚の比較考察を通して両国文学の特性を検討した。韓棣「托物寄情、各標豊采——『聊齋志異』『紅樓夢』『源氏物語』各一組細節描写芸術談」<sup>22)</sup>は、三つの作品にそれぞれ一つの細かい描写を選び、比較し分析をした。吉田とよ子「日中比較文学の難しさと面白さ——『源氏物語』と『紅樓夢』の場合」<sup>23)</sup>では、二つの作品の直接的な影響関係はゼロだが、どちらも中国の南方文学の流れを汲んでおり、一つの河から分かれた二つの支流のようなものであると考えられ、『源氏物語』と『紅樓夢』の主人公に焦点を当て、彼らの「悲哀」を見つめて検討した。孫佩霞・谷中信一「『紅樓夢』と『源氏物語』における恋愛——尚会鵬『中国与日本人』より——」<sup>24)</sup>は、尚会鵬『中国与日本人』の一部の邦訳であり、時代と文化的背景、主人公の愛及び内心の矛盾、美意識から両作品の相違点について考察



した。合山究「『源氏物語』と『紅樓夢』」<sup>25)</sup>は、二つの作品の類似点と共通する情調、恋愛と恋愛観の特徴などについて討議した。陳熙中、王秋陽[訳]「山口大学人文学部異文化交流研究施設 第18回講演会講演録『紅樓夢』と『源氏物語』の異同」<sup>26)</sup>は、中国における『紅樓夢』と『源氏物語』の比較研究についてまとめた。郭潔梅「『源氏物語』和『紅樓夢』：評豊子愷翻譯中文版〈訳本序〉」<sup>27)</sup>は、紫式部と『源氏物語』の成立・背景を通して豊子愷の「訳本序」について考察した。郭楊「『源氏物語』と『紅樓夢』における女性達の愛情婚姻観の比較について」<sup>28)</sup>は、『紅樓夢』の秦可卿と『源氏物語』の浮舟の相似点と相違点を比較することで二人の悲劇性の淵源を検討した。

また、吉田とよ子『色は匂へど——『源氏物語』と中国の艶情文学』<sup>29)</sup>の「第二部『源氏物語』と『紅樓夢』」は、『源氏物語』の「艶」の世界が、中国の情艶文学の流れと関係から、時間と空間を越え、人種・歴史・文化の違いを越えて通じ合う両作品の「本質的な共通点」を追究し検討した。

### Ⅲ. 中国における『源氏物語』と『紅樓夢』との比較研究について

中国の『源氏物語』の研究は、豊子愷の訳本が出版されてから本格的に始まったが、その後の1990年代および2000年以降、さらに数種の訳本が現われ『源氏物語』の普及に大いに寄与するものとなった。それと同時に、日本の「紅学」の研究を超える勢いで、近年、中国の「源学」の研究論文の数も増え続けている。中国における『源氏物語』と『紅樓夢』との比較研究は、大雑把に次のようにまとめられる。

#### (1) 『源氏物語』と『紅樓夢』との汎論的な比較の研究

この類の比較研究は非常に多く、全面的に二つの作品を対比して考察するため、二つの作品の特色と異同を巨視的に把握するのに役立つ。

沈新林「两部驚人相似的巨著——論『紅樓夢』与『源氏物語』的異同」<sup>30)</sup>は、全面的に二つの作品を比較して考察した。同論文では、紫式部と曹雪芹はどちらも貴族家庭の出身で祖父などの文学の造詣が非常に深い点、両作品はどちらも主人公の恋愛や婚姻を通して貴族社会を描写する写実的な作品であり、作中では細かい心理描写を運用するのも特徴的である点を指摘している。温祖蔭「『源氏物語』与『紅樓夢』」<sup>31)</sup>は、二つの作品が日

中それぞれの文学発展史において金字塔的な意義を持ち、東方の古典小説の最も高い到達点を代表するのであり、しかも専門的な学問の「紅学」と「源学」が形成されたとする。王浩明「『源氏物語』与『紅樓夢』之比較研究」<sup>32)</sup>は、紫式部が世界で最初の長篇の写実小説の作者であると考え、封建と反封建の角度から二つの作品の主題、主人公の恋愛の悲劇や芸術の表現などについて検討した。葉琳「浅析『源氏物語』与『紅樓夢』的藝術特色」<sup>33)</sup>は、二つの作品はどちらもその描写が写実的で自然であり、しかも構造がしっかり組み立てられ、貴族家庭の内部の矛盾をよく描き、詩も文章も優れて典雅であるとした。陶陶「異曲同工的哀歌——論『源氏物語』与『紅樓夢』主題的悲劇性」<sup>34)</sup>は、二つの作品が貴族世界の盛衰史を描いており、戦争の場面を避け、主に貴族家庭の内部の日常生活や男女の婚姻と恋愛などを描いていると指摘している。光源氏と賈宝玉の女性に対する態度はどちらも汎愛的な特徴を持っており、光源氏の紫の上に対する愛情、賈宝玉の林黛玉に対する愛情描写は作者が最も力を入れたところである。郭存愛「『源氏物語』与『紅樓夢』比較研究」<sup>35)</sup>は、二つの作品がどちらも愛情を借りて政治を語る特徴があると考え、二つの作品ではどちらも愛情を中心に描写するが、様々な側面から反映されたのが社会制度の問題である。経美英「『源氏物語』与『紅樓夢』」<sup>36)</sup>は、『源氏物語』が現われてから八世紀を経て『紅樓夢』が生まれた点に加え、曹雪芹の執筆時には『源氏物語』がまだ中国に伝来していないため、二つの作品間に関係が全くなく、互いに影響し合うには全くありえないとした。葉渭渠「中日古代文学意識——儒道仏：以『紅樓夢』和『源氏物語』比較为中心」<sup>37)</sup>は、二つの作品がともに貴族社会の全盛の時代に生まれ、儒教および仏教から深い影響を受けていると指摘した。杜鵑「『源氏物語』与『紅樓夢』比較談」<sup>38)</sup>は、紫式部と曹雪芹が二人とも貴族家庭の出身で、人生の思わぬ出来事を経験し、上流社会に対して現実的で冷靜的な認識を持ち、その人生の体験を文学作品を通して表現したとする。趙連元「『源氏物語』与『紅樓夢』美学比較初探」<sup>39)</sup>は、『源氏物語』が貴族社会の艶情史を描き、『紅樓夢』が封建社会の盛衰史を描いたと考える。牟応杭「『源氏物語』与『紅樓夢』」<sup>40)</sup>は二つの作品の創作の特徴を比較し、紫式部の『源氏物語』を「紫学」と呼ぶ。姜伏虎「『紅樓夢』与『源氏物語』之比較」<sup>41)</sup>は創作の方法と環境、心理描写などから二つの作品の芸術的特色について考察した。姜伏虎「『紅樓夢』与『源

氏物語』之比較」<sup>42)</sup>は二つの作品の時代の特色、貴族の盛衰、一夫多妻などについて比較して検討した。饒道慶「『源氏物語』和『紅樓夢』比較研究綜述与思考」<sup>43)</sup>は1985年から2003年にかけての20年近くの『源氏物語』と『紅樓夢』の比較研究の概況をまとめた。張銅学・龍菊英「『紅樓夢』与『源氏物語』比較研究」<sup>44)</sup>は情、欲、悲、奇の四つの方面から二つの作品を比較し分析した。劉之傑「『源氏物語』与『長恨歌』、『紅樓夢』的不解之縁」<sup>45)</sup>は、『源氏物語』が平安時代の『長恨歌』でもあれば、また日本の『紅樓夢』でもあると考える。顧鳴塘「文化的交融与分流——浅論『紅樓夢』与『源氏物語』的全面比較研究」<sup>46)</sup>は『紅樓夢』と『源氏物語』の比較研究の概況を整理した。李光沢「『源氏物語』和『紅樓夢』的比較研究」<sup>47)</sup>は近年の二つの作品の比較研究を整理した。朱英姿「中国古代文学对日本文学的影響——『紅樓夢』和『源氏物語』之比較」<sup>48)</sup>は、二つの作品の比較を通して、中国古典文学の影響を受ける日本漢文学が日本文学における重要な位置を占めることを考察した。呂冬陽「『紅樓夢』与『源氏物語』的比較研究」<sup>49)</sup>は、二つの作品に現われる作者の小説観と創作観の異同を比較し検討した。王明娟・趙淑彦・劉岩「一衣帶水的雙璧聯珠——『源氏物語』和『紅樓夢』比較研究」<sup>50)</sup>は二つの作品における貴族社会と悲劇美学、理想主義の芸術の特色を比較し考察した。白金鷺・劉斌「『源氏物語』与『紅樓夢』共通点浅析」<sup>51)</sup>は登場人物の設定や芸術などから二つの作品の異同を比較し検討した。姜沙沙「『紅樓夢』与『源氏物語』的比較研究」<sup>52)</sup>は人間描写や社会の風俗などから二つの作品の共通点を比較し検討した。

## (2) 人間描写の比較研究

人間描写が優れているのは『源氏物語』と『紅樓夢』の共通の特色でもあれば、後世に評価されるところでもある。登場人物の比較研究の中で最も多いのは光源氏と賈宝玉との比較研究である。また、女性を際立たせて女性への描写の傾注も二つの作品の共通の特徴である。ヒロインの比較研究において紫の上の研究は最も注目されるのである。近年、明石道人と賈雨村、乳母の研究など、作中でそれほど重要ではない登場人物の研究も現われた。

馮茜「賈宝玉与光源氏之比較」<sup>53)</sup>は二人の主人公の性格と人生の態度、精神的な帰結などから二人の人間描写を比較して考察した。李曉梅「賈宝玉和光源氏：由情

悟空的心路歷程」<sup>54)</sup>は、二人の主人公の人生描写が汎愛および「情から空へ悟る」という特徴を持ち、男女の関係を描くとき「富貴」の二字から離れないとする。潘新華「賈宝玉与光源氏比較研究」<sup>55)</sup>は、汎愛、情と欲、内心の矛盾、出家などから二人の主人公の異同を比較した。阮煜「賈宝玉与源氏人物形象的比較探析」<sup>56)</sup>は賈宝玉と光源氏の比較研究を通して、二人の主人公の人間描写の差異が、作者の時代の背景や性別、社会の閥歴の違いから来たのであると考える。付岩志「賈宝玉与源氏公子情史發展比較」<sup>57)</sup>は、情を動く、情を問う、情を困る、情を傷む、情を忘れるという五つの方面から賈宝玉と光源氏の愛情史について比較して検討した。朱當「『源氏物語』中光源氏与『紅樓夢』中賈宝玉之比較」<sup>58)</sup>は、光源氏と賈宝玉との人間描写について耽美主義などの特徴と傾向があると指摘した。梁英平「從精神分析角度探究專情与濫情的思想動因——以曹雪芹『紅樓夢』中的賈宝玉和紫式部『源氏物語』中的源氏公子為例」<sup>59)</sup>は賈宝玉と光源氏を例にして、二人が専情と濫情を形成する動機について考察した。張惠「補天与出世——『源氏物語』中源氏与『紅樓夢』中賈宝玉形象之比較」<sup>60)</sup>は出世と出家という二つの側面から光源氏と賈宝玉の人間描写の特徴を考察した。楊紅「於兩部輝煌的名著中見男人之愛情觀——我看『源氏物語』中的源氏公子与『紅樓夢』中的賈宝玉」<sup>61)</sup>は、二つの作品の男の主人公の愛情と婚姻生活を比較した。周美池「幻滅与解脫：『源氏物語』与『紅樓夢』男主人公文化人格建構比較研究」<sup>62)</sup>は、欲望の幻滅と宗教的解脫から二つの作品の主人公の人格の構成の特色と異同を考察した。俞仁琰「『源氏物語』和『紅樓夢』中主人公的對比」<sup>63)</sup>は出身と価値観、愛情観などを通して二つの作品の人間描写を比較した。錢澄「人性与獸性的糾結——光源氏与西門慶、賈宝玉比較研究」<sup>64)</sup>は、光源氏が内面的に賈宝玉に似ており、行為的に西門慶に似ると考え、最後紫の上の死に彼の人生を終結させた。趙小平「『紅樓夢』与『源氏物語』男主人公之比較」<sup>65)</sup>は、二人の主人公が女性に対する態度や恋愛観、および内心世界の異同について比較し考察した。王京鈺・鄭文婷「賈宝玉与光源氏比較」<sup>66)</sup>は二人の主人公の時代背景と家庭の環境、恋愛観、価値観、後世の評価などを比較して考察した。李婧「『源氏物語』和『紅樓夢』主人公對比探討」<sup>67)</sup>は、出身や成長の環境、結末、女性と官途に対する態度などの比較を通して二人の主人公の人間描写の異同を考察した。孫娟「賈宝玉与光源氏愛情觀之比較」<sup>68)</sup>は幸福を求める視点

から二人の主人公の愛情観の異同および結末を比較し考察した。

陳永生「封建時代中日兩國婦女的悲歌——試比『紅樓夢』与『源氏物語』中的女性形象」<sup>69)</sup>は女性描写を通して二つの作品の異同を比較した。葉琳「『源氏物語』『紅樓夢』女性形象之比較」<sup>70)</sup>は女性観や道徳観、審美の意識という三つの視点から二つの作品の女性描写を考察した。楊飛飛「『紅樓夢』与『源氏物語』女性形象之比較——以形象的悲劇美为中心」<sup>71)</sup>は人間の悲劇の描写を中心にして、『紅樓夢』の「夢」と『源氏物語』の「物語」における創作の特色を考察した。朱琴「『紅樓夢』与『源氏物語』中女性人物的比較」<sup>72)</sup>は、ジェンダーの社会的な角度から二つの作品の女性描写の特徴について考察した。魏丕植「皈依与消隱——『紅樓夢』与『源氏物語』女性崇拜神化歷程的比較」<sup>73)</sup>は、二つの作品における女性崇拜と女性的人格化的描写について比較して考察した。周韜・孫楚「『源氏物語』与『紅樓夢』中女性群像悲劇命運的比較」<sup>74)</sup>は葵の上と薛宝釵、紫の上と林黛玉、六条御息所と王熙鳳を中心に、二つの作品の悲劇女性の描写を考察した。張鈺「源氏物語“紫姫”与中国“十二金釵”」<sup>75)</sup>は、紫の上と十二釵との比較を通して、作品の悲劇の特色を比較した。孫静「『紅樓夢』与『源氏物語』女主人公命運解讀」<sup>76)</sup>は、父母と恋人、薄命などの比較を通して二つの作品の運命の描写を考察した。彭貞「『紅樓夢』与『源氏物語』女性形象比較研究」<sup>77)</sup>は二つの作品の女性の描写を通して、女性に対する作者の態度を考察した。

周青「紫姫与薛宝釵——兩個封建淑女形象之比較」<sup>78)</sup>は、紫の上と薛宝釵を貴族社会の理想的な人間と考えて、紫の上は日本の国花の桜に喩えられ、薛宝釵は中国の国花の牡丹に喩えられるとする。顧鳴塘「東方古典文学宝庫中的兩顆明珠——論紫姫与薛宝釵」<sup>79)</sup>は、出身と家庭、人生の態度、文化の教養などから二つのヒロインの人間描写の特徴を比較した。劉浩・畢大群「紫姫与黛玉：心理異変与死亡意志」<sup>80)</sup>は、文化の社会背景と生活の環境、婚姻恋愛の遭遇から二人のヒロイン紫式部と林黛玉の死亡の悲劇とその原因について考察した。劉晨陽「『紅樓夢』与『源氏物語』中的女性悲劇——基于作者以及女主人公紫姫与薛宝釵的相似性探究」<sup>81)</sup>は、紫の上と薛宝釵との比較を通して、二つの作品の進歩的な女性観について考察した。

姜伏虎「『紅樓夢』与『源氏物語』之比較」<sup>82)</sup>は女性の群像、明石道人と賈雨村、光源氏と賈宝玉を通して、

二つの作品の人間描写の特徴について検討した。牛立保「『源氏物語』与『紅樓夢』人物形象的对比性研究」<sup>83)</sup>は人間描写を通して二つの作品の特色と異同を考察した。王玲「『源氏物語』中的乳母形象分析——兼与『紅樓夢』中的乳母形象相比較」<sup>84)</sup>は二つの作品の乳母の人間描写について比較して考察した。姜曉寒「試論『源氏物語』中六条御息所的病態美形象——与『紅樓夢』中林黛玉比較」<sup>85)</sup>は六条御息所と林黛玉の病的な美人の描写を通して、日中の審美学と文化の差異について考察した。李先瑞「兩個善妬的女人——試比較王熙鳳和六条妃子」<sup>86)</sup>は、二つの作品における嫉妬深い女性である王熙鳳と六条御息所の人間描写を比較し考察した。沈穎「兩個孤女——『源氏物語』中的夕顔と『紅樓夢』中的黛玉之比較」<sup>87)</sup>は身の上と運命などを通して夕顔と林黛玉の人間描写の異同を比較し考察した。

### (3) その他の比較研究

1980年代と1990年代の研究は、二つの作品を精読した上で、内容の比較を通して両作品の特色と差異を考察するのが往々してあった。近年、多くの研究は、まず一つまたは複数の研究視点を選出し、研究視点によって様々な角度から二つの作品を解読し、比較分析を行う。

安源「紫式部与曹雪芹美学思想之比較」<sup>88)</sup>は、唯物主義的な文学観や写実主義的な創作論、典型化と獨創性などから、二つの作品の美学思想や芸術の特色を検討した。李英武「試析『源氏物語』与『紅樓夢』愛情描写之異同」<sup>89)</sup>は、二つの作品の恋愛描写が、女性や女性の問題を中心とする特徴があると指摘している。潘道正「文化心理制約下的文学接受——從『源氏物語』和『紅樓夢』中的人物形象談起」<sup>90)</sup>は文化心理や文学の受容の角度から、日本と中国で紫の上と薛宝釵に対する評価と態度が形成された原因と差異について比較して考察した。袁学敏「淺談『源氏物語』和『紅樓夢』的宗教帰宿」<sup>91)</sup>は二つの作品がともに仏教と儒教の思想から影響を受けたと考える。饒道慶「『源氏物語』和『紅樓夢』的“好色”比較——兼論日中古代文化的“好色”観对両書的影响」<sup>92)</sup>は、日中の両国の「好色」及び好色観をその根拠に、「好色」の角度から二つの作品の特色について考察した。顧鳴塘「關於依田学海的『源氏物語』与『紅樓夢』及其他」<sup>93)</sup>は日本の学者の依田学海の「源氏物語と紅樓夢」という文章を紹介した。杜娟「賈宝玉与光源氏“尋母”意識探跡」<sup>94)</sup>は「母を失う」から「母を恋う」へ、最後「母を捜し求める」という視点から賈宝玉



と光源氏のマザーコンプレックスについて比較し考察した。顧鳴塘「関于松枝茂夫的『紅樓夢与源氏物語』及其他」<sup>95)</sup>は日本の学者の松枝茂夫の「『紅樓夢』と『源氏物語』」の文章を紹介した。杜娟「『紅樓夢』和『源氏物語』母性原型探跡」<sup>96)</sup>は母親、花園、神話の三つの側面から二つの作品の母性の主題を考察した。顧鳴塘「『源氏物語』中の“唐錦”与『紅樓夢』中の“雲錦”」<sup>97)</sup>は二つの作品において貴族の豪華を代表する「錦」の描写を通して、絹が作品における働きおよび主人公の服飾の色彩の差異について考察した。顧鳴塘「另一種功用：再論『源氏物語』与『紅樓夢』中の“錦”」<sup>98)</sup>は、「錦」が貴重な織物とされる以外、また貴族の身分や富貴の象徴として両作品における使用の異同について考察した。岑群霞「『紅樓夢』与『源氏物語』之語用模糊比較」<sup>99)</sup>は統計学的方法から二つの作品の語学学的な特徴を比較した。楊芳「『紅樓夢』与『源氏物語』英訳史対比研究」<sup>100)</sup>は二つの作品の英訳史の比較を通して日中の文化輸出の特徴と差異について比較して検討した。魏丕植「道不自器，与之圓方——『源氏物語』与『紅樓夢』創作觀之比較」<sup>101)</sup>は、媒介学や題材学などを通して二つの作品の創作觀の特徴を考察した。鮑輝「『紅樓夢』与『源氏物語』的悲劇意識比較」<sup>102)</sup>は二つの作品の悲劇主題の思想の比較を通して日中の悲劇の美学意識の淵源と差異について考察した。曹曉航「『紅樓夢』与『源氏物語』魂靈形象比較研究」<sup>103)</sup>は、二つの作品における「魂靈」の描写の異同の比較考察を通して、「魂靈」の描写が中国では儒教に影響され、日本では神道の文化に影響されたとする。胡泊「『源氏物語』和『紅樓夢』中體現的物哀美意識」<sup>104)</sup>は「物の哀れ」という日本の美的理念から二つの作品の特色を考察した。趙姚紅「從『紅樓夢』与『源氏物語』中的論画管窺曹雪芹与紫式部的繪画觀」<sup>105)</sup>は、作中で繪画の創作を討論する描写から、二つの作家の繪画觀を比較して考察した。楊芳「『紅樓夢』与『源氏物語』三類線性時間叙写」<sup>106)</sup>は、二つの作品の時間描写の特徴について考察した。王珊珊「比較『源氏物語』与『紅樓夢』中虛實結合的異同」<sup>107)</sup>は、二つの作品における虚構と真実の描写の特色を比較し考察した。楊芳「『紅樓夢』与『源氏物語』“悲美”之綱要」<sup>108)</sup>は「悲」を美とする二つの作品の創作の特色を考察した。郭李飛「『源氏物語』和『紅樓夢』比較研究——以“好色”為中心」<sup>109)</sup>は、二つの作品における「好色」についての描写の異同を比較し検討した。許凌薇「『源氏物語』和『紅樓夢』之中日貴族社会的異同」<sup>110)</sup>は二つ

の作品における貴族社会の描写の異同を比較し考察した。

#### IV. おわりに

『源氏物語』は中国に入るとすぐ、極めて高い評価を与えられ、世界最初の長篇小説、偉大な現実主義の傑作、東方古典文学の最高の到達点を代表する等、その称賛の辞はこれ以上加えることができぬほどに多い。1980年代以降、中国における『源氏物語』の研究が迅速に発展し、そのなかで『源氏物語』と『紅樓夢』の比較研究が行われてきたのは特筆すべき点である。饒道慶「『源氏物語』和『紅樓夢』比較研究綜述与思考」<sup>111)</sup>では、『紅樓夢』と外国文学との比較研究の中で『源氏物語』との比較研究が恐らく最も多いだろうと思われるとする。尤海燕「20世紀『紅樓夢』比較研究綜述」<sup>112)</sup>でも、外国文学の名著の中で『源氏物語』が『紅樓夢』と最も比べられる作品と思われるとする。『源氏物語』と『紅樓夢』との比較研究は、中国の「源学」研究において占める比重が非常に大きいだけでなく、『紅樓夢』の比較文学の研究の中で、中国文学と外国文学を含めて、それに比肩させることができるのは恐らく『紅樓夢』と『金瓶梅』との比較研究のみである。なぜ『源氏物語』がこのように中国人研究者に注目されるのだろうか。当初、豊子愷が『源氏物語』を翻訳した時、「今又白頭訳紅樓（白頭、今、又『紅樓』を訳す）」と書き、『源氏物語』を翻訳するのを、『紅樓夢』を翻訳すると喩えた。豊子愷は『源氏物語』の「訳後記」において、『源氏物語』の原文が『論語』や『檀弓』のような古文体に近く、現代白話文で訳されると、原文の作風をなかなか表現できないと述べた<sup>113)</sup>。一方、豊子愷は『源氏物語』を、『紅樓夢』と似ているような古典風で訳し、その上原著が日本漢文学から深く影響を受けていることで、中国の読者にとって親近感があって受けられやすい。中国人は習慣的に『源氏物語』を日本の『紅樓夢』と呼ぶが、日本の『三国演義』或いは日本の『西遊記』とは呼ばない。明らかに中国人の読者からみれば、『源氏物語』は彼らに『紅樓夢』と『金瓶梅』以外に、また貴族家庭小説の特徴を有し、しかも女性描写への傾注を特色とし、貴族社会を描いた長篇世情小説を提供したのである。しかし、『源氏物語』はやはり日本に生まれ、それに体现される「物の哀れ」という日本本土の美学思想と、中国本土の主情思想の影響で生まれた『紅樓夢』に体现される文学の境地は、読者をして似ているようだが

全部がそうでもないと感じさせている。

### 注

- 1) 豊子愷の1965年11月2日「訳後記」(〔日本〕紫式部著・豊子愷訳『源氏物語(下)』、人民文学出版社、1983年、1289頁)。
- 2) 日本における『紅樓夢』の流布については、伊藤漱平「日本における『紅樓夢』の流行——幕府から現代までの書誌的素描」(古田敬一編『中国文学の比較文学の研究』、汲古書院、昭和61年〔1986〕、449-495頁)が詳しい。後に『伊藤漱平著作集 第3巻 紅樓夢編(下)』(汲古書院、平成20年〔2008〕)に所収。また中国語訳に、〔日〕伊藤漱平・成同社訳『『紅樓夢』在日本的流伝——江戸幕府末年至現代』(『紅樓夢研究集刊』第14輯、上海古籍出版社、1989年10月、445-488頁)がある。
- 3) 『紅樓夢』研究において、比較的早い段階でこの記事について言及したのは、呉泰昌「『紅樓夢』在日本流伝」(『戦地増刊』、1978年第2期〔11月〕、人民日報出版社)、胡文彬『紅氍毹語』(遼寧人民出版社、1986年6月)、前掲の伊藤漱平「日本における『紅樓夢』の流行——幕府から現代までの書誌的素描」、胡文彬著『紅樓夢在国外』(中華書局、1993年11月)等が挙げられる。
- 4) 王宝平主編『日本藏晚清中日朝筆談資料：大河内文章』(第5冊「戊寅筆談二十一」、浙江古籍出版社、2016年12月、2179-2180頁)。また、實藤惠秀・鄭子瑜は、『大河内文書』のうち、黄遵憲と日本の友人の筆談の部分を引き出し、『黄遵憲與日本友人筆談遺稿』(早稲田大学東洋文学研究会、1968年、182-183頁)を編成して出版された。
- 5) 顧鳴塘「關於依田学海的『源氏物語』与『紅樓夢』及其他」(『紅樓夢學刊』2006年第4輯、253頁)。
- 6) 竹柏會『心乃花』(第十卷第四号、明治三十九年〔1909〕四月)。
- 7) 謝六逸『日本文学(全)』(開明書店、1929年8月増訂再版〔1927年9月初版〕、117-130頁)。
- 8) 周作人「談日本文化書」において「五十二卷」とされるが、誤る。松枝茂夫が翻訳するとき「五十四帖」に直した。
- 9) 周作人『瓜豆集』(実用書局、1969年4月港一版、74頁)。
- 10) 松枝茂夫訳『瓜豆集』(創元社、昭和15年〔1940〕、107頁)。
- 11) 岡一男著『源氏物語事典』(春秋社、昭和39年〔1964〕12月、502頁)。
- 12) 前掲の顧鳴塘「關於依田学海的『源氏物語』与『紅樓夢』及其他」、249頁。
- 13) 錢稻孫「源氏物語(選訳)・桐壺(源氏物語第一帖)」(『訳文』1957年8月号、70-80頁)。
- 14) 豊子愷著『豊子愷全集・文学卷六』(海豚出版社、2016年4月、230頁)。
- 15) 益田勝実「紅樓夢論争と源氏物語研究」(日本文学協会編集『日本文学』4巻4号、1955年4月)。
- 16) 松枝茂夫・杉浦明平「対談：『紅樓夢』の魅力」(『文学』1977年第45巻5月号)。
- 17) 目加田さくを「紅樓夢大観園の貴公子と源氏物語六条院の貴公子」(平安文学研究会『平安文学研究』第73輯、昭和60年〔1985〕6月)。
- 18) 目加田さくを「紅樓夢と源氏物語——対偶よりみたる——」(源氏物語探求会編『源氏物語の探求』第14輯、平成

- 元年〔1989〕9月)。
- 19) 楊顯義「『源氏物語』と『紅樓夢』——主人公を中心として」(『立命館文学』第505号、昭和63年〔1988〕3月)。
- 20) 陳彬彬「『源氏物語』の空蟬、浮舟と『紅樓夢』の晴雯、尤三姐にみられる反抗的性格について」(愛知大学外国語研究室『外語研紀要』第12号、1988年3月)。
- 21) 齋藤喜代子「『紅樓夢』と『源氏物語』の色彩表現について」(『二松』第4集、平成2年〔1990〕3月)。
- 22) 韓棟「托物寄情、各標豊采——『聊齋志異』『紅樓夢』『源氏物語』各一組細節描写芸術談」(『熊本商大論集』第39巻第2号〔通巻第93号〕、1993年1月)。
- 23) 吉田とよ子「日中比較文学の難しさと面白さ——『源氏物語』と『紅樓夢』の場合」(『ソフィア』49巻第1号、2000年5月)。
- 24) 孫佩霞・谷中信一「『紅樓夢』と『源氏物語』における恋愛——尚会鵬『中国与日本人』より——」(『日本女子大学紀要・文学部』第54号、2005年3月)。
- 25) 合山究「『源氏物語』と『紅樓夢』」(『Fukuoka UNESCO』第45号 福岡国際文化セミナー2008 特集号 続・日本の文化と心——日本語を基座として——)、福岡印刷株式会社、2009年7月)。
- 26) 陳熙中、王秋陽[訳]「山口大学人文学部異文化交流研究施設 第18回講演会講演録『紅樓夢』と『源氏物語』の異同」(『異文化研究』4、2010)。
- 27) 郭潔愷「『源氏物語』和『紅樓夢』：評豊子愷翻譯中文版〈訳本序〉」(天理大学中国文化研究会『中国文化研究』31、2015年3月)。
- 28) 郭楊「『源氏物語』と『紅樓夢』における女性達の愛情婚姻観の比較について」(『東アジア文化研究』、2018年2月)。
- 29) 吉田とよ子「色は匂へど——『源氏物語』と中国の艶情文学」(Sophia University Press 上智大学、2004年10月)。
- 30) 沈新林「両部驚人相似的巨著——論『紅樓夢』与『源氏物語』的異同」(『塩城師專學報』1985年第3期)。
- 31) 温祖蔭「『源氏物語』与『紅樓夢』」(『国外文学』1985年第4期)。
- 32) 王浩明「『源氏物語』与『紅樓夢』之比較研究」(『鎮江師專學報(社会科学版)』1987年第4期)。
- 33) 葉琳「浅析『源氏物語』与『紅樓夢』的藝術特色」(『現代日本経済』1989年第5期)。
- 34) 陶陶「異曲同工的哀歌——論『源氏物語』与『紅樓夢』主題的悲劇性」(『紅樓夢學刊』1990年第4輯)。
- 35) 郭存愛「『源氏物語』与『紅樓夢』比較研究」(『遼寧大學學報』1992年第2期)。
- 36) 経美英「『源氏物語』与『紅樓夢』」(『文史知識』1994年第10期)。
- 37) 葉渭渠「中日古代文学意識——儒道仏：以『紅樓夢』和『源氏物語』比較为中心」(『日本學刊』1995年第1期)。
- 38) 杜鵬「『源氏物語』与『紅樓夢』比較談」(『連雲港職業大學學報』1995年第3期)。
- 39) 趙連元「『源氏物語』与『紅樓夢』美学比較初探」(『首都師範大學學報(社会科学版)』1996年第5期)。
- 40) 牟志杭「『源氏物語』与『紅樓夢』」(『貴州文史叢刊』1995年第6期)。
- 41) 姜伏虎「『紅樓夢』与『源氏物語』之比較」(『江蘇政協』2002年第9期)。
- 42) 姜伏虎「『紅樓夢』与『源氏物語』之比較」(『江蘇政協』2002年第10期)。



- 43) 饒道慶「『源氏物語』和『紅樓夢』比較研究綜述與思考」(『紅樓夢學刊』2004年第3輯)。
- 44) 張銅學· 竜菊英「『紅樓夢』與『源氏物語』比較研究」(『懷化學院學報』第25卷第12期、2006年12月)。
- 45) 劉之傑「『源氏物語』與『長恨歌』、『紅樓夢』的不解之緣」(『電影文學』2008年第8期)。
- 46) 顧鳴塘「文化的交融與分流——淺論『紅樓夢』與『源氏物語』的全面比較研究」(『紅樓夢學刊』2009年第1輯)。
- 47) 李光沢「『源氏物語』和『紅樓夢』的比較研究」(『內蒙古民族大學學報』第15卷第3期、2009年5月)。
- 48) 朱英姿「中國古代文學對日本文學的影響——『紅樓夢』和『源氏物語』之比較」(『現代語文』2009年第9期)。
- 49) 呂冬陽「『紅樓夢』與『源氏物語』的比較研究」(『短篇小說(原創版)』2014年第35期)。
- 50) 王明娟· 趙淑彥· 劉岩「一衣帶水的雙璧聯珠——『源氏物語』和『紅樓夢』比較研究」(『山西財經大學學報』第36卷第S1期、2014年4月)。
- 51) 白金鷺· 劉斌「『源氏物語』與『紅樓夢』共通點淺析」(『青年文學家』2017年第27期)。
- 52) 姜沙沙「『紅樓夢』與『源氏物語』的比較研究」(『青年文學家』2017年第26期)。
- 53) 馮茜「賈寶玉與光源氏之比較」(『徐州師範學院學報』1994年第2期)。
- 54) 李曉梅「賈寶玉與光源氏：由情悟空的心路歷程」(『紅樓夢學刊』1995年第3輯)。
- 55) 潘新華「賈寶玉與光源氏比較研究」(『湖州師範學院學報』2001年第5期)。
- 56) 阮煜「賈寶玉與源氏人物形象的比較探析」(『湖南第一師範學報』第5卷第2期、2005年6月)。
- 57) 付岩志「賈寶玉與源氏公子情史發展比較」(『紅樓夢學刊』2006年第5輯)。
- 58) 朱營「『源氏物語』中光源氏與『紅樓夢』中賈寶玉之比較」(『職業圈』2007年第18期[總第70期])。
- 59) 梁英平「從精神分析角度探究專情與濫情的思想動因——以曹雪芹『紅樓夢』中的賈寶玉和紫式部『源氏物語』中的源氏公子為例」(『新西部』2009年第2期)。
- 60) 張惠「補天與出世——『源氏物語』中源氏與『紅樓夢』中賈寶玉形象之比較」(『昆明理工大學學報(社會科學版)』第9卷第2期、2009年2月)。
- 61) 楊紅「于兩部輝煌的名著中見男人之愛情觀——我看『源氏物語』中的源氏公子與『紅樓夢』中的賈寶玉」(『才智』2009年第3期)。
- 62) 周美池「幻滅與解脫：源氏物語與『紅樓夢』男主人公文化人格建構比較研究」(『天府新論』2009年S1期)。
- 63) 俞仁琰「『源氏物語』和『紅樓夢』中主人公的對比」(『商品與質量』2011年4月刊)。
- 64) 錢澄「人性與獸性的糾結——光源氏與西門慶、賈寶玉比較研究」(『閩江學刊』第2期、2013年4月)。
- 65) 趙小平「『紅樓夢』與『源氏物語』男主人公之比較」(『長春理工大學學報(社會科學版)』第26卷第3期、2013年3月)。
- 66) 王京鈺· 鄭文婷「賈寶玉與光源氏的比較」(『遼寧工業大學學報(社會科學版)』第15卷第4期、2013年8月)。
- 67) 李婧「『源氏物語』和『紅樓夢』主人公對比探討」(『短篇小說(原創版)』2013年第24期)。
- 68) 孫娟「賈寶玉與光源氏愛情觀之比較」(『九江學院學報(社會科學版)』2017年第4期[總第187期])。
- 69) 陳永生「封建時代中日兩國婦女的悲歌——試比『紅樓夢』與『源氏物語』中的女性形象」(『韶關大學學報』1996年第3期)。
- 70) 葉琳「『源氏物語』『紅樓夢』女性形象之比較」(『現代日本經濟』1989年第5期)。
- 71) 楊飛飛「『紅樓夢』與『源氏物語』女性形象之比較——以形象的悲劇美為中心」(『魅力中國』2010年第14期)。
- 72) 朱琴「『紅樓夢』與『源氏物語』中女性人物的比較」(『考試周刊』2010年第16期)。
- 73) 魏丕植「皈依與消隱——『紅樓夢』與『源氏物語』女性崇拜神化歷程的比較」(『凱裏學院學報』第30卷第5期、2012年10月)。
- 74) 周韜· 孫楚「『源氏物語』與『紅樓夢』中女性群像悲劇命運的比較」(『名作欣賞』2012年第24期)。
- 75) 張鈺「源氏物語“紫姬”與中國“十二金釵”」(『青春歲月』2013年11月[上])。
- 76) 孫靜「『紅樓夢』與『源氏物語』女主人公命運解讀」(『短篇小說(原創版)』2014年第3期)。
- 77) 彭貞「『紅樓夢』與『源氏物語』女性形象比較研究」(『湖北經濟學院學報(人文社會科學版)』第12卷第9期、2015年9月)。
- 78) 周青「紫姬與薛寶釵——兩個封建淑女形象之比較」(『國外文學』1990年第2期)。
- 79) 顧鳴塘「東方古典文學寶庫中的兩顆明珠——論紫姬與薛寶釵」(『紅樓夢學刊』1997年第3輯)。
- 80) 劉浩· 畢大群「紫姬與黛玉：心理異變與死亡意志」(『延邊大學學報』2003年第4期)。
- 81) 劉晨陽「『紅樓夢』與『源氏物語』中的女性悲劇——基於作者以及女主人公紫姬與薛寶釵的相似性探究」(『安徽文學』2011年第6期)。
- 82) 姜伏虎「『紅樓夢』與『源氏物語』之比較」(『江蘇政協』2002年第11期)。
- 83) 牛立保「『源氏物語』與『紅樓夢』人物形象的對比性研究」(『才智』2010年第13期)。
- 84) 王玲「『源氏物語』中的乳母形象分析——兼與『紅樓夢』中的乳母形象相比較」(『山花』2011年第14期)。
- 85) 姜曉寒「試論『源氏物語』中六條御息所的病態美形象——與『紅樓夢』中林黛玉比較」(『時代教育』2012年第23期)。
- 86) 李先瑞「兩個善妒的女人——試比較王熙鳳和六條妃子」(『時代文學(下半月)』2015年第1期)。
- 87) 沈穎「兩個孤女——『源氏物語』中的夕顏和『紅樓夢』中的黛玉之比較」(『芒種』2016年第6期)。
- 88) 安源「紫式部與曹雪芹美學思想之比較」(『內蒙古電大』1994年第2期)。
- 89) 李英武「試析『源氏物語』與『紅樓夢』愛情描寫之異同」(『東北亞論壇』1995年第1期)。
- 90) 潘道正「文化心理制約下的文學接受——從『源氏物語』和『紅樓夢』中的人物形象談起」(『廣西師範大學學報』2002年研究生專輯)。
- 91) 袁學敏「淺談『源氏物語』和『紅樓夢』的宗教歸宿」(『西南民族學院學報』2000年第21卷增刊)。
- 92) 饒道慶「『源氏物語』和『紅樓夢』的“好色”比較——兼論日中古代文化的“好色”觀對兩書的影響」(『文藝研究』2004年第6期)。
- 93) 顧鳴塘「關於依田學海的『源氏物語』與『紅樓夢』及其他」(『紅樓夢學刊』2006年第4輯)。
- 94) 杜娟「賈寶玉與光源氏的“尋母”意識探跡」(『河南教育學

- 院學報（哲學社會科學版）』2007年第2期）。
- 95) 顧鳴塘「關於松枝茂夫的『紅樓夢與源氏物語』及其他」（『紅樓夢學刊』2007年第6輯）。
- 96) 杜娟「『紅樓夢』和『源氏物語』母性原型探跡」（『河南教育學院學報（哲學社會科學版）』2008年第4期）。
- 97) 顧鳴塘「『源氏物語』中的“唐錦”與『紅樓夢』中的“雲錦”」（『紅樓夢學刊』2009年第3輯）。
- 98) 顧鳴塘「另一種功用：再論『源氏物語』與『紅樓夢』中的“錦”」（『紅樓夢學刊』2009年第4輯）。
- 99) 岑群霞「『紅樓夢』與『源氏物語』之語用模糊比較」（『阜陽師範學院學報（社會科學版）』2011年第4期〔總第142期〕）。
- 100) 楊芳「『紅樓夢』與『源氏物語』英訳史對比研究」（『中國文學研究』2012年第4期）。
- 101) 魏丕植「道不自器、與之円方——『源氏物語』與『紅樓夢』創作觀之比較」（『貴州師範大學學報（社會科學版）』2012年第5期〔總178期〕）。
- 102) 鮑輝「『紅樓夢』與『源氏物語』的悲劇意識比較」（『林区教學』2013年第2期〔總第191期〕）。
- 103) 曹曉航「『紅樓夢』與『源氏物語』魂靈形象比較研究」（『河北工程大學學報（社會科學版）』第30卷第3期、2013年9月）。
- 104) 胡泊「『源氏物語』和『紅樓夢』中體現的物哀美意識」（『開封教育學院學報』第33卷第5期、2013年9月20日）。
- 105) 趙姚紅「從『紅樓夢』與『源氏物語』中的論畫管窺曹雪芹與紫式部的繪畫觀」（『名作欣賞』2013年第30期）。
- 106) 楊芳「『紅樓夢』與『源氏物語』“悲美”之綱要」（『華西語文學刊』第11輯）。
- 107) 王珊珊「比較『源氏物語』與『紅樓夢』中虛實結合的異同」（『作家』2014年第22期）。
- 108) 楊芳「『紅樓夢』與『源氏物語』“悲美”之綱要」（『華西語文學刊』第11輯）。
- 109) 郭李飛「『源氏物語』和『紅樓夢』比較研究——以“好色”為中心」（『蘭州教育學院學報』第31卷第6期、2015年6月）。
- 110) 許凌薇「『源氏物語』和『紅樓夢』之中日貴族社會的異同」（『商業故事』2016年第25期）。
- 111) 前掲注(43)を参照。
- 112) 尤海燕「20世紀『紅樓夢』比較研究綜述」（『河南教育學院學報（哲學社會科學版）』2004年第5期〔總91期〕）。
- 113) 前掲注(1)、1290頁。